

Title	あとがき
Sub Title	
Author	古石, 篤子(Koishi, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2008-02
Jtitle	リサーチメモ. 混乱・模索するろう教育の現場 : 教育政策・言語政策のはざままで ,p.73- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0593-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あとがき

ことばというものは人と人をつなぐ役割も持つが、同時に人を抑圧する力も持っている。筆者は昨年9月にカナダに行った際に、「ことばが暴力として襲いかかってくる」ということを経験した。ご存知のようにカナダは二言語多文化主義の国で、国レベルの公用語は英語とフランス語の二つある。それはトロントからモントリオール（フランス語読みにする）とモンREAL）へ向かうために並んだエア・カナダのカウンターで起きた。チェックインの際、一緒に旅をしていた同僚（＝フランス語教師）にちょっとしたトラブルがあった。そこで彼はフランス語で説明をしようとしたのだが、対応した男性の係員に” Speak English !”（英語を話せ!）と怒鳴られたのである。胸に John という名札をつけたその男性の態度は威圧的でとりつくしまもなく、人種差別的な臭いさえした。後で聞いたところによると、航空会社のカウンターでの職員のそのような態度は、カナダでは十分に処罰に値するということであった。カナダの国是に照らしてそれは当然であろう。それに、そのときの係員とのやり取りは傍に居た私にさえ大きなショックを与え、怒りと共に一種のトラウマのようになって胸に沈殿した。ことばで表現された内容に対してではなく、「ことば自体の否定」は大きな暴力になりうるのだ。それは存在がまるごと否定されるような感覚といたらいいだろうか。相手との間に分厚い壁が立ちはだかってしまう感覚といたらいいだろうか。それは絶対的な拒絶なのだ。

ろう児は、自分のことばが尊重されず、他者のことばを押し付けられる環境を長い間生きてきた。日本ろう者劇団の米内山明宏さんが聞いた「声を出せ」は上の「英語を話せ」と同じ響きだ。

「…それで先生に指されて、私の発言になったから手話でやったんです。そうしたら『声を出せ』って言われました。…」(齊藤 1999*, p. 55)

いやそれどころか、自分のことばさえしっかり持てないろう児も多くいるのだ。そして、私たちのほとんどがそのことに気づかないで生きてきた… 知らないことはやっぱり罪だろうと思わざるをえない。

私はもっと多くの人間が異言語・異文化を生きる体験をすべきだと思う。ことばが通じない体験、ことばを拒否される体験、自分のことをわかってもらえない体験、等々。ふだんあまりにも当たり前でそこにある世界がほんの少し不透明になるとき、モノリンガル・

* 齊藤道雄 (1999) 『もうひとつの手話ーろう者の豊かな世界』晶文社。

モノカルチュラルで堅牢な世界が少し揺さぶられて隙間ができる。そこに、他者へ思いを馳せる力が芽生えるのだ。

湘南藤沢学会から再びリサーチメモという形で、新しいろう教育への道筋を提示する報告書を発行できて嬉しい。

2008年1月

古石 篤子